～秋の遠足号～

# Newspace

# 郡山東高校新聞 速報版８０号

編集・発行
郡山東高等学校新聞部
発行人　八巻ちしろ
編集人　古川　美羽
〒963-8832　福島県
郡山市山根町13-45
電話　024-932-0898
FAX　024-932-1404

## 遠足で良い思い出を作る
### ３年　那須ハイランドパーク
### １年　いわき方面

今月14日、1年生と3年生の遠足が行われた。1年生はアクアマリンふくしまなどのいわき方面、3年生は那須ハイランドパークへ行き、友達とさらに親睦を深め良い思い出を作った。同日から4日間予定されていた2年生の関西方面への修学旅行は新型コロナウイルスの影響により、27日から3日間岩手・秋田方面への旅行へと延期・日程の変更がされた。2年生の修学旅行については、次号で特集する。

### 3年生　那須ハイへ

今月14日に3年生は栃木県那須町にある、那須ハイランドパークへ遠足に出かけた。現地へ到着したときには少し曇っていて天気が悪かったが、時間が経つにつれ良くなり、絶好の遠足日和となった。パーク内にはさまざまなアトラクションやコーナーがあり期間限定のイベントも開催され、東生はそれぞれ好きなところをまわり、有意義な時間を過ごした。絶叫系のアトラクションが人気を集めたが、動物とのふれあいを楽しむこともでき、充実した1日となった。

遠足に参加した菅野恵生さん（3年）は「とても楽しい1日だった。受験勉強の気分転換をすることができ、友達と良い思い出を作ることもできた」と満足そうに話した。また上野真理子さん（3年）は「今年は新型コロナウイルスの影響もあり、那須ハイランドパークに行くことができるか心配だったが、無事に行くことができ友達とも楽しく過ごすことができた。しかし、3年間で最後の行事が終わってしまい、とても悲しい」と名残惜しそうに話した。（鰍）

↑友達とパーク内で過ごし親睦を深める３年生

→アトラクションに乗り、楽しい思い出を作る3年生

### 1年生　いわきへ

同じく14日に1年生はいわき方面に遠足に出かけ、クラス内での親睦を深め、楽しい時間を過ごした。

バスで約1時間半の移動では、友達と会話をするなどして楽しんだ。

アクアマリンふくしまには、たくさんの種類の魚や貝などがいる。館内には、照明の暗い場所やジャングルのような場所などがあり、カニは特に迫力があった。展示には生き物の特徴以外に飼育員が呼んでいる名前も掲載されている。たとえば、オスのアザラシは「くらまる」といった愛らしい名前がつけられている。東生の中で、特に人気を集めていたのは、通路の左右や天井を見上げるとエイなどの魚を間近で見ることができるところだ。大きな水槽にいろいろな魚が泳ぎ、幻想的な雰囲気を醸し出している。どの水槽もライトアップされ、写真を撮る東生が多くいた。また、アクアマリンふくしまにはちょうどテレビ局が取材に来ていて、東生の中にはテレビに出演した人もいた。このような日程にない出来事があり、印象に残る思い出となった。

アクアマリンふくしまの後は、イオンモールいわき小名浜といわき・ら・ら・ミュウで自由に行動できる時間が設けられた。どちらもアクアマリンふくしまから約5分で着くほど近い場所にある。イオンモールいわき小名浜は2018年に開業し、4階まであるモール内には、雑貨店や飲食店などの人気店が数多く立ち並んでいる。ここでは「いわきと言ったら…」と考え、先生方を含め海鮮丼を食べる人が多くいた。普段とはまた違う環境の中で友達と昼ご飯を食べみんなが笑顔になった。

いわき・ら・ら・ミュウではいわきの特産品が豊富に取り揃えられているため、お土産を買うのを楽しんだり、建物を出てすぐにあるきれいな海を眺めたりする人もいた。

次に、バスで移動して約15分の石炭・化石館ほるるに行った。ほるるは常磐炭田の採掘の歴史と、市内で発掘された化石を展示している。音と照明で化石をダイナミックに展示したり、スライド上映をするなど見るだけでは分かりにくい部分が説明されているため、深く学ぶことができた。一番注目を集めたのは模擬坑道だ。ここは、昭和10年ごろ地下600㍍に降りて採掘していたところを再現しており、どんな方法で石炭を掘っていたかを見ることができた。

この遠足を通して根本陸斗さん（1年）は「バスの中で長い時間友達と会話をしたり、おいしい食べ物を食べたりすることができてクラス内の親睦を深めるいい機会になった。今後の学校生活がより豊かになればいい」と笑顔で話した。（冬凛）

→アクアマリンふくしまにいる迫力のあったカニ

←友達との昼ご飯を楽しむ1年生

## ひと

### 「仲間と切磋琢磨しあい夢のインターハイへ」
### 陸上部　遠藤勇貴さん（2年）

1位になったときは何も感じなかった。本当に数秒の差であったため、今でも実感が湧かない。

8月に行われた福島県高等学校新人大会陸上競技県南地区大会男子110㍍ハードルで優勝した。小学校6年生のときにハードルを始め、中学生のときは200㍍などの短距離を専門としていた。高校では、顧問の先生や同級生、先輩のアドバイスもあり、またハードルに挑戦することに決めた。

部活動のときはできるだけ早く部室に行き、練習時間を確保するようにしている。家ではお風呂上がりに家族に協力してもらい、ストレッチをする。その後、家の周りでハードルを跳ぶ。

部活動と勉強の両立に関しては、部活動がある日は家に帰るのが遅くなってしまうため勉強は朝早く起きて取り組んだり、学校生活の中での隙間時間を活用している。睡眠前にホットミルクを飲むことは普段の生活で欠かせないことだ。

大会の決勝では緊張しないように、胸を叩くことで会場の雰囲気にのみこまれないように工夫した。決勝が終わったあと、とにかく無事に終わってよかったとてもほっとした。

趣味は鉛筆で絵を描いたり、切り絵で作品を作ったりすることだ。切り絵に関しては、彼岸花を作ることにも挑戦したことがあった。また、新型コロナウイルスの影響による休校期間中には、これらのことだけでなく、折り紙にも挑戦した。

陸上競技で一番楽しいことはリレーだ。仲間と協力して挑む競技であるため、勝負に勝ったときは仲間と共に勝利の喜びを味わうことができ、達成感を感じる。

今後は今の現状に満足せず仲間と切磋琢磨し合い、インターハイ出場に向けて全力で練習に取り組んでいきたい。（ムラマル）

## 意味が伝わるものを創る
### ～放送部　ドラマ撮影～

東高放送部は11月に行われる第25回福島県高校新人放送コンテストのテレビキャンペーン部門に出場する。

昨年は県大会で優良賞、ラジオキャンペーン部門で最優秀賞を取り、東北大会に出場した。だが、今年は新型コロナウイルスの影響で東北大会がなくなってしまった。

今年のコンテストのテーマは「輪」だ。このテーマについて代表者の阿部柚花さん（1年）は「輪」から「ゼロ」という言葉を連想し「ゼロ」をひねると「無限」になると考えたそうだ。ドラマのあらすじは学校でテストを返却する際、明るい性格の天野さんが0点を取って落ち込んでいてしっかり者の木下さんが励ましたが、実は木下さんも0点だったというもので、最後に笑いがある。このドラマは1分間の短編ドラマとなっている。

阿部さんは大会に作品を出品する際、ラジオキャンペーン部門とテレビキャンペーン部門のどちらかを選ぶことになった。そのとき趣味が画像の編集であるため、これを生かすことができるテレビキャンペーン部門で面白いドラマを作ることを決めた。

エキストラとして参加し、テストを返す先生役として出演した演劇部の遠藤真吾さん（2年）は同じ部活動の友達に「エキストラとして一緒に出演しないか」と誘われ、参加を決めた。先生らしさを表現するため、大きな声ではっきり話すことに注意したそうだ。遠藤さんは「主役2人の仲の良さが際立つ最後の掛け合いに注目して見てほしい」と話した。

阿部さんは見どころと今後の目標について「オチの励ましている木下さんも実は0点だというところが見どころだ。参加してくれたエキストラとともに最高の作品にしたい。アナウンス部門でもテレビキャンペーン部門でも相手に作品の意味が伝わるものを作りたい」と笑顔で語った。（冬凛）

→ドラマ撮影リハーサル中のエキストラたち

←見どころを語る阿部さん

## 東照手記

昨年の夏、1年生3人で初めて校外で取材した。東高卒業生で元五輪選手の千葉麻美さん（35）に会うためだ。それまでは校内で先輩と一緒に取材をすることがほとんどだったため、分からないことは先輩に頼れば大丈夫と安心しきっていた。しかし今回の取材は全て自分たちで行わなければいけない。緊張しながら、千葉さんの働く矢吹町役場へ向かった▼千葉さんは短距離を専門とする経験豊富なアスリートだ。会う前はとても強そうなイメージがあり、話しづらいかなと勝手に思っていた。予定した質問を一通りし終えて、少し雑談をした。「子どもにハンバーグを作ってあげて、喜んでもらえるとうれしい」と話している千葉さんの幸せそうな笑顔は今でも忘れられない▼その後記事を書いたり、バランスを考え、レイアウトを決めたりしてようやく発行できた。発行後、新聞部では必ず次の紙面に生かせるように反省会をする。その場で、自分では見つけることのできなかった改善点を部員からたくさん教えてもらった。自分としては全力で取り組んだことため、こんなにもだめなところがあるのかとショックだった。しかし、次は完璧な記事を書こうという強いきっかけとなった▼今、そのときの経験は役立っている。取材の際、どんな質問をすれば取材相手が話しやすくなるか、どうすれば笑顔をカメラに収めることができるか。これらを常に考えながら取材をすることができるようになってきた。新聞部に入部して千葉さんのような素敵な人とも出会うことができ、刺激をもらい日々やりがいを感じながら過ごしてきた。気づけば部活動引退まで1年もない。一日一日を大切に、有意義なものにしていきたい。（紫陽花）